

28 「コモリン岬」 見田宗介

■凡例

- 1 ①②…は形式段落番号。◆は、設問。
2 ▽は、本文の追跡・分析。
3 ▼は、読解に関する技法。
4 ☆は、記述に関する技法。

■見通しと追跡

- ① ●一九九〇年四月の初めに、わたしはインドのコモリン岬（カニャ・クマリ）にいた。コモリン岬はインド亜大陸の最南端で、朝はベンガル湾から日が昇り、昼はインド洋を日が渡り、夕方はアラビア海に日が沈む、という場所である。
- ② ●ある朝わたしは、そのベンガル湾から日が昇るときに立ち会おうと、暗いうちから磯に出てみた。ごつごつとした岩場みたいな足触りの岸に、漁船がたくさん上げられて休息している。目がなれてくると、一つ一つの漁船の陰に、二つとか三つ、布にくるまって眠っているような人間がいる。それからまた別の漁船の向こうでは、いくつもの目が息をひそめてわたしを見守っているように感じた。
- ③ ●東の雲のすきまから朝の最初の日の光が一条射るようにさし渡ってくると、岩肌はいっそう黒々と陰影を見せて立体を立ち上がらせるが、向こうの海は紫や朱や、黄金色や緑を点滅する刻々の変幻を開始している。遠い変幻に吸い込まれるみたいに岩場を渡って行くと、不意に激しく切迫した、ほとんど金切り声みたいな人間の声が聞こえる。声はいくつもの声と重なって、言葉の意味は分からないが、わたしにそれ以上先に行つてはいけなないと叫んでいることだけは分かった。暗がりによくつもの目が光って近づいてくる。それは漁船の陰で寝ていたあの人間たちの目であると、それから別の漁船の向こうからわたしを見ていた目であると、わたしは思った。（聖域）があるな、とわたしは思った。人間が立ち入ることのできない、少なくともわたしのような異教の人間が立ち入ることを許されていない、（聖域）があるな。あの切迫した金切り声のような制止の声は、彼らにとつて大切な（聖なもの）を、守る声だな。▽一つのエピソードから。小説の読み方技法と同様、時・場所・人・状況を確認。プラス、語り手の（考えたこと）である傍線部を記憶しておこう。

- ④ ●そのようにわたしは想像したことのうちには、昨日の経験があった。
- ⑤ ●「コモリン岬」という、外の世界に知られている英語の地名は、クマリという現地の言葉のイギリス人風のなまりで、クマリとは少女、特にここでは神話の中の、生命の源泉ともいべき聖なる少女である。岬の先端にはこの少女を祀る聖所があって、インドの各地から訪れてくる巡礼者たちの信仰の対象である。参詣する男性たちが

は上半身裸とならなければならないが、それはこの少女神が男性の裸体を好むからであり、男たちはすべてその身体を少女神への捧げ物として礼拝を遂げる。胎内のように暗い空間をひしめき合う精子のように男性たちの群れにまじって本尊に達し、もういちど一気に明るく熱帯の日射しの下に出ると、いきなり現代の巨大な政治的プロパガンダの図像が競い立っているという、◆1何とも超現実主義的なトリップであった。▽小説でもよくある背景事情の説明。筆者が、〈聖域〉があるな、と想像した理由は、昨日、この土地の一つの〈聖域〉を経験していたからである。

◆問1「何とも超現実主義的なトリップ」とはどのようなことか。

〔説明〕には、二つのポイントがある。一つは、それは、具体的に何をさしているのか。二つめは、それがどのような点で「超現実主義的」なのか。

具体的には「聖なる少女を祀る聖所に参拝したこと」をさしている。しかし、ポイントには参拝の後、現代的な政治的主張の看板か何かを目にしたという、その落差にある。

喩えとして使われている「超現実主義」についても知っておこう。シュルレアリスムともいう。「理性によるいつさいの制約、美学上、道徳上のいつさいの先入見を離れた、思考の書き取り」と定義される（ブルトン『シュルレアリスム宣言』一九二四年）のだが、人間の深層心理の姿をそのままに表出しようとする芸術の方法を指す。

ここでは、「胎内のように暗い空間」／「明るい熱帯の日射しの下」が、それぞれ、〈深層（夢）の世界〉／〈現実（理性）の世界〉、と対応させられている。

昨日の経験が、夢から現実への急激な転換という感覚をもたらしたことをいっている。

〔解答例〕「聖なる少女を祀る聖所に参拝したとき、胎内のように暗い空間から明るい熱帯の日射しの下へ突然出たことが、夢から現実への急激に世界が変わったような感覚をもたらした、ということ。」

- ⑥ ●とにかくその土地の信仰を大切にすることは、旅する者の大切な心がけ第一条だから、わたしは現代人間として釈然としない気持ちにはあったが、◆2その地点から先に踏み込むということをしなかった。

◆問2「その地点」とはどこか。

☆指示内容は、直前抜き出しが原則だが、④⑤は挿入段落なので、見るのは③。何があった地点か、という形で書くしかない。一例は、

〔解答例1〕「筆者が、漁船の陰で寝ていた人間たちや別の漁船の向こうから見ていた人間たちから、それ以上先に行つてはいけないと叫ばれた地点。」

というもの。☆主語意識、をもって、主語を入れる方がいい。ただし、正確には、何

といわれたのか、については、筆者の推定なのだから、その点を考慮した答案も書ける。どちらでもいい。

「解答例2」「筆者が、漁船の陰で寝ていた人間たちや別の漁船の向こうから見ていた人間たちから叫ばれ、筆者がそれを、それ以上先に行つてはいけないという意味だ（ここから先に聖域があるのだ）」と受け取った地点。」

☆主語、については、「人間たち」を主語にしてもいい。「…人間たちが、筆者に…と叫んだ地点。」

⑦ ●わたしが足を踏み入れるつもりがないことがわかると、金切り声は止んで、一転して屈託のない明るい声があちこちから話しかけてきた。明るくなってきた光の中で見ると、みんな一〇代の前半くらいの男の子たちだった。思ったとおり、さっきまで漁船の陰でころがって寝ていた子どもたちである。家の中で寝るよりも気持ちがいいのだという。彼らはわたしがそれ以上足を踏み入れなかったことに、ほんとうに喜んでいたのである。**「読1」けれども理由は、わたしが想像していたものとは全然ちがった。**

⑧ ●わたしが立っていた場所のもう一歩先は、突然の淵になっていて、どのくらい深いかわからなかった。そういう場所は他にもあって、彼らはわたしがどんどん歩いて行くので、どきどきしながらずっと見ていたのだという。よかった。と、彼らは口々に言っていて、くり返しうれしそうにうなずいてみせた。

⑨ ●それからいろんなとりとめのいい少年たちとふざけ合い、笑い合つてすごした。まるで、わたしはこの底ぬけに気のいい少年たちとふざけ合い、笑い合つてすごした。わたしがカメラをもっている事を見つけると、ひしめいて写真を撮ってくれとせがんだ。意味もなく無為に過ごした朝だったのだが、ふしぎに忘れることのできない一日となった。

▽小説的にいえば、一つの場面転換。緊張・恐怖と夜明け前の暗さから、一転して、すべてが明らかになつて、気のいい少年たちの親切心・ふざけあい、日が昇つてからの明るい海岸の様子に変わる。印象的な、エピソードの結末である。

さて、これは、評論であるから、ここから、何かをいおうとするだろう。何がテーマなのか。

⑩ ●人に話しておもしろいような「事件」は何もないから、旅の話をするようなときも、この日の話をするとはなかった。「現代社会の比較社会学」という主題で話をするときに、伝えようとしたことの核心、「数値にならないもの」「言葉にならないもの」の次元の存在ということにふれるとき、思い起こされているいろんな情景たちのひとつに、いつもこの子どもたちと、この朝の記憶とがあったけれども、◆3意味のない予感の切れはしみたいに、話の中からは削除されていた。

▽このエピソードが、何か大事なことに関連している、ということが示唆されている。

とりあえず、「数値にならないもの」「言葉にならないもの」の次元の存在」ということばをおさえておく。

◆問3「意味のない予感の切れはし」とはどのようなことか。

次の⑩に「突然この朝の経験の「意味」が、くつきりとした立体のように立ち上つてきた」とあることから、そのときは意味がわからなかったが、何か大事な意味がこめられているようなかすかな予感が、そのときにも感じられていた、ということだとわかる。解答として仕上げるには、☆傍線部を延長して、「数値にならないもの」「言葉にならないもの」の次元の存在ということにふれるとき、思い起こされているいろんな情景たちのひとつに、いつもこの子どもたちと、この朝の記憶とがあったけれども、／意味のない予感の切れはしみたいに、話の中からは削除されていた」という全体をいにかえる。☆切り身にして、／より前と後に分ける。前は縮めるだけ。後半を自分のことばでいいかえる。そこがポイント。

「解答例」「数値や言葉にならないものがある」とこの朝の経験が、関係があるような予感だけがあつたが、結局はその意味がわからないままだったということ。」

⑪ ●一五年もたつて、二〇〇四年の一月二日になって、突然この朝の経験の「意味」が、くつきりとした立体のようにわたしの中で立ち上つてくるということがあつた。

⑫ ●二〇〇四年一月二日の「スマトラ沖大地震」は、南インド一帯を襲う空前の津波となつて、とりわけ東海岸の漁村漁村に壊滅的な被害を与えた。日本人の行かないカニヤ・クマリについての報道は何もなかったから、インターネットで地域の現況を検索してみると、一件だけカニヤ・クマリのレポートがあつた。

⑬ ●ヴィヴェーカーナンド・ロックというカニヤ・クマリの沖合の岩場の上に、数百人の旅行者たちが津波のために取り残された。救助に向かったインド空軍のヘリコプターも、数回の「出撃」の試みの末に結局救助を断念し、水と食料を投下するほかは手の下しようもなかった。このとき一〇〇人以上ものカニヤ・クマリの漁師たちが、高潮の逆巻く海に生命の危険を賭して小さい漁船でくり返し乗り出して行き、五〇〇人以上の旅行者たちの生命を救った。「わたしたちが今日生きているのは、この土地の漁師たちのおかげです。」と、プーナからの旅行者は証言している。取材した記者に漁師の一人は、「助けを求める人たちがいる。やるしかないでしょう。」と答えている。

⑭ ●一五年前のあの底抜けに屈折のない少年たちは、今立派な漁師たちになっている年頃である。少年のうちの幾人かは、この果敢な行動に加わっていることはまちがいないと、わたしは思う。「やったな。あいつら！」わたしは自分の身内のことでもあるように誇りに思った。もちろんわたしにそんな権利など何ひとつないことは分かっているのに。そ

れでも◆4うれしくて仕方がなかった。大人になったら失われる、ということのない（きれいな魂）というものがある。〔読2〕（きれいな魂）の生きつづける世界というものがあ
る。この世界を行動によって再生産し、守りつづける人びとがある。

◆問4「うれしくて仕方がなかった」のはなぜか。

☆なぜ↓どのように。うれしさ、がやってきた過程を整理して示せばいい。注目すべきは「一五年前のあの底抜けに屈折のない少年たちは、今立派な漁師たちになっている年頃である。少年のうちの幾人かは、この果敢な行動に加わっていることはまちがいないと、わたしは思う」の部分。☆とりあえず、書くなら「少年のうちの幾人かは、この果敢な行動に加わっていることはまちがいないと思っただから」。その上で、「少年」の説明、「この果敢な行動」の説明を加えればよい。

〔解答例〕「十五年前に自分を危険から守ってくれた少年たちのうちの幾人かが、旅行者の救出という果敢な行動に加わっていることはまちがいないと思っただから。」
※「かつてと同じ（きれいな魂）を失わず」を前半と後半の間に挿入してもいい。

⑮ ●一五年前、現代人間の感覚からすれば「何の関係もない」一人の旅の人間の、勝手な独り歩きを危険から守りぬくために、あんなにも金切り声を上げ、夢中で制止した少年たちの声は、やはりひとつの（聖域）を、守り通す声であったのではないか。失われてはならないひとつの（世界）の存在を、守りぬく声であったのではないか。少年たちの精神はそれを意識しないが、少年たちの身体がそれを反応してしまう。身体は精神よりも真正である。この（聖域）は、けれども区切られた聖域ではない。排除するための聖域ではない。全世界に広がって行くこともできる聖域である。わたしたち自身の方でそれを拒否しているのではないなら。

▽最終段落に、判断と主張が集中している。対比も使われている。⑩に示唆されていた予感（意味）の内容もここで明らかにになる。ただし、これ以上詳しく説明されない。自分なりに整理して、☆実感としてつかんでおくべきだ。

- ・ 現代人間：知らない人間は自分たちとは関係ない存在。
- ・ 少年ら：知らない人間の危険に対し、夢中で制止した。
- ・ 少年らの声：（聖域）＝失われてはならないひとつの（世界）の存在を守り通す声。
- ・ （聖域）を守る声は、（身体）が発するもの。
- ・ 身体（魂）√精神。
- ・ （聖域）：全世界に広がっていく。

いろんなことを考えさせる。まず、少年たちの「命」に対する反応は、ほとんど本能的なものだということ。中国古代の思想家、孟子の「惻隱の情」を思い出す。よちよち歩きの子が井戸に落ちそうなのを見れば、誰でも思わずかけつけて助けようとするだろう、と孟子はいう。人間は、本能的に（善）をもっているのだ、というのであ

る。失われてはならないひとつの（世界）、といわれているのは、無条件にすべての「命」は守られなければならないという直観・本能が生きている世界である。わざわざ「現代人間」というものと対比する形で筆者がこの世界・聖域を示しているのは、「現代人間」の世界では、命への直観が死にかけているからだろう。精神と身体を比較して、身体の真正さをいつている点にも注意したい。ここでは（魂）は、むしろ身体のように属している。

ただ、自分の命を賭して人を助ける、という（美談）は、一つ間違えば、（公）のために（私）の命を投げ出すことを称揚する戦中のような精神主義にすりかえられてしまう。これだけは覚えておいてほしいが、戦争に人間を動員するときには、ここでいわれている（聖域）を徹底的に破壊して、作り上げられた大義名分という精神的な幻想に従うように身体を改造し麻痺させる。そうでないと、面と向かった「何の関係もない」（敵兵）の命を奪うことはできない。「何の関係もない」（旅人）の命を救おうとするのが、人間の性善的身体だとするなら、自分の命を賭して国を救うという精神主義は、まったくの逆の行為だということがわかるだろう。

命への直観が生きている（聖域）は、国や民族を超える。経済的な利害をも超える。私たちの世界は、経済的なものだけが地球化し、精神的なものとは閉鎖的に対立している。しかし、身体が発する、命への直観が生きている（聖域）は、地球化の可能性をもっている。そういう意味では、殺さない、と宣言する、私たちの憲法は、地球上に広がる可能性をもっている。しかし、私たちに、少年たちのような真正な身体は保たれているか？可能性と反省が同時にやってくる。ただ、みんなで生きようという憲法の声は、正しく身体から発しているものだということは間違いない。真正な身体を信じよう。

■読解問題1「けれども理由は、わたしが想像していたものとは全然ちがった」とあるが、実際はどのような理由だったのか、説明しなさい。目安八〇字。

☆対比の形で。「私は」と想像していた。しかし、実際は「だった」という形でまとめる。きちんと該当箇所を確定すること。

（私の想像）「（聖域）があるな、とわたしは思った。人間が立ち入ることのできない、少なくともわたしのような異教の人間が立ち入ることを許されていない、（聖域）があるな。あの切迫した金切り声のような制止の声は、彼らにとって大切な（聖なもの）を、守る声だな。」

（実際）「わたしが立っていた場所のもう一歩先は、突然の淵になっていて、どのくらい深いかわからなかった。そういう場所は他にもあって、彼らはわたしがどんどんと歩いて行くので、どきどきしながらずっと見ていたのだという。」

〔解答例〕「筆者は、異教徒が立ち入っていない聖域があるから制止しているのだと想像していた。しかし、実際は、筆者が立っていた場所の先が危険な淵になっていたから制止したのだ。」（八〇字）

